

2006年12月

全国の50～79歳の男女900名に聞いた 『中高年者の人付き合いに関する調査』

～「近所とお互いに自宅を行き来する」男性11%・女性25%、「助け合える友人がいる」男性41%・女性60%～

第一生命保険相互会社（社長 斎藤 勝利）のシンクタンク、（株）第一生命経済研究所（社長 石嶺 幸男）では、全国に居住する50～79歳の男女900名を対象に、標記についてのアンケート調査を実施いたしました。

この程、その調査結果がまとまりましたのでご報告いたします。

《調査結果のポイント》

「別居親族」との付き合いの頻度 (P2～3)

- 付き合いの頻度で最も多いのは「月に1～3回」(32%)で、次いで「年に数回」(28%)。
- 付き合いの頻度が高い(「ほとんど毎日」+「週に1回以上」)のは、男性(25%)よりも女性(38%)、50代(27%)よりも60代(34%)や70代(33%)。
- 「1人世帯」や「夫婦のみ世帯」は付き合いの頻度が高く、約3分の1が「ほとんど毎日」あるいは「週に1回以上」会ったり、連絡を取り合ったりしている。
- その一方で、「1人世帯」の約1割は、付き合いがほとんどない。

「近所」との付き合いの頻度 (P4～5)

- 付き合いの頻度で最も多いのは「会えば、立ち話をする程度」(40%)で、次いで「会えば、あいさつをする程度」(35%)。「お互いに自宅を行き来する人がいる」は2割未満と少ない。
- 「お互いに自宅を行き来する人がいる」は、男性(11%)よりも女性(25%)の方が多い。
- 60代と70代では、「お互いに自宅を行き来する人がいる」「会えば、立ち話をする程度」ともに多く、付き合いの頻度が高くなる。
- 20年以上居住していても、約3分の1は近所と親しく会話する間柄ではない。

助け合える友人の有無 (P6～7)

- 友人がいる人は、男性(41%)よりも女性(60%)の方が多い。
- 友人がいる人は、50代と60代では過半数を占めるが、70代(47%)になると少なくなる。
- 友人がいる人は、配偶者がいる(48%)人よりも、いない(56%)人の方が多い。

緊急時の連絡先 (P8)

- 男性では「配偶者」(77%)、女性では「子ども」(77%)が最も多い。
- 未婚者や子どもがいない人では、「きょうだい」が6割前後と最も多い。

＜お問い合わせ先＞

(株)第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部
研究開発室 広報担当 (丹野・新井)
TEL. 03-5221-4771
FAX. 03-3212-4470

【アドレス】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>

☆本報告書は、当研究所から隔月発行している『ライフデザインレポート』11-12月号をもとに作成したものです。
レポートご希望の方は、左記の広報担当、またはホームページからお申し込みください。

《アンケート調査の実施概要》

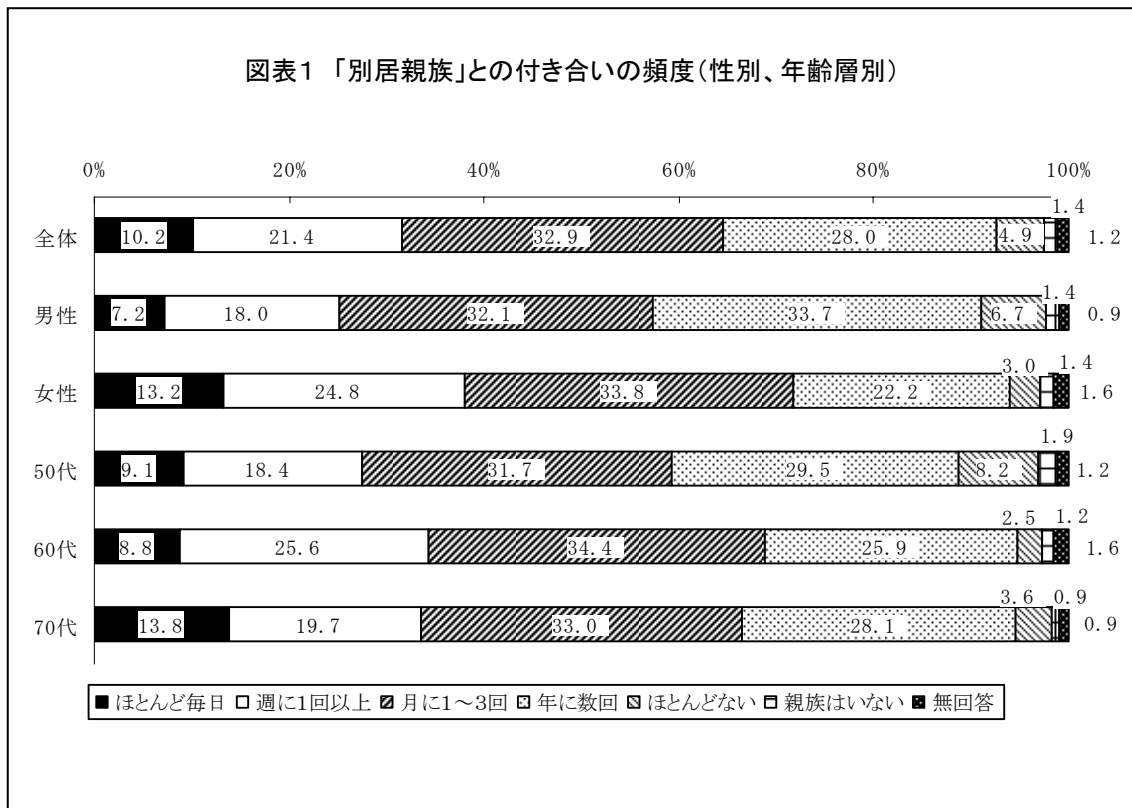
- | | |
|-------------|--------------------|
| 1. 調査地域と対象 | 全国に居住する 50～79 歳の男女 |
| 2. サンプル数 | 900 名 |
| 3. サンプル抽出方法 | 第一生命経済研究所生活調査モニター |
| 4. 調査方法 | 質問紙郵送調査法 |
| 5. 実施時期 | 2005 年 10～11 月 |
| 6. 有効回収数(率) | 865 名 (96.1%) |
| 7. 回答者の属性 | |

(単位：人 (%))

		男性 (N=433)	女性 (N=432)
年齢層	50代	146 (33.7)	173 (40.1)
	60代	142 (32.8)	178 (41.2)
	70代	145 (33.5)	79 (18.3)
	不明	0 (0.0)	2 (0.4)
婚姻状況	未婚	34 (7.9)	43 (9.9)
	既婚	346 (79.9)	256 (59.3)
	離婚	26 (6.0)	55 (12.7)
	死別	27 (6.2)	78 (18.1)

「別居親族」との付き合いの頻度①

最も多いのは「月に1～3回」(32%)で、次いで「年に数回」(28%)。付き合いの頻度が高い(「ほとんど毎日」+「週に1回以上」)のは全体の3割しかおらず、男性よりも女性、50代よりも60代と70代で高い。



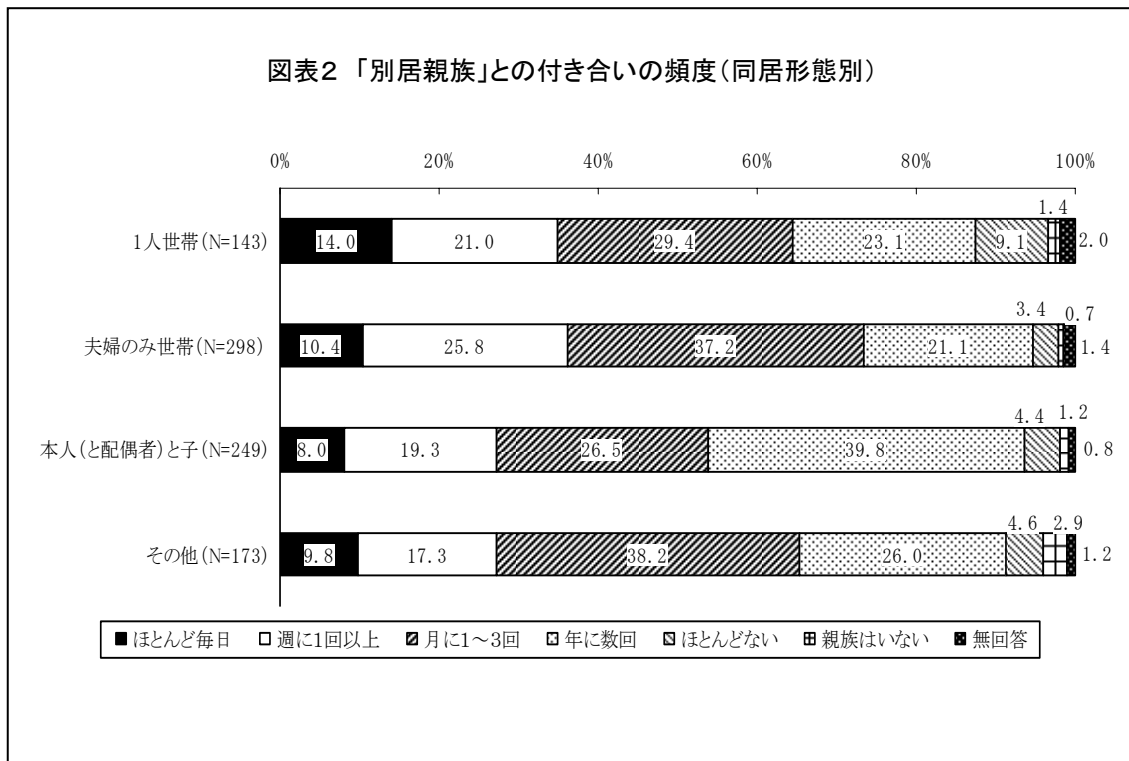
子どもや兄弟姉妹などの親族のうち、別居している人とはどのくらいの頻度で会ったり、電話などで連絡を取り合ったりしているのかを尋ねたところ、「月に1～3回」(32.9%)が最も多く、次いで「年に数回」(28.0%)、「週に1回以上」(21.4%)の順になりました。

性別で見ると、男性では「年に数回」(33.7%)が最も多く、「ほとんど毎日」(7.2%)あるいは「週に1回以上」(18.0%)は、あわせても25.2%しかありませんでした。それに対して女性では、「ほとんど毎日」(13.2%)あるいは「週に1回以上」(24.8%)をあわせて38.0%もあり、男性よりも女性の方が親族との付き合いの頻度は高いと言えます。

年齢層別で見ると、どの年代も「月に1～3回」が最も多く、「ほとんど毎日」あるいは「週に1回以上」は、60代(34.4%)と70代(33.5%)では3分の1を占めるのに対し、50代では27.5%にとどまりました。また、50代では「ほとんどない」が8.2%もあり、他の年齢層を上回りました。全体的に、親族との付き合いの頻度は、60代と70代で高いことがみてとれます。

「別居親族」との付き合いの頻度②

「1人世帯」や「夫婦のみ世帯」は付き合いの頻度が高く、約3分の1が「ほとんど毎日」あるいは「週に1回以上」会ったり、連絡を取り合っている。その一方で、「1人世帯」の約1割は、付き合いが「ほとんどない」。

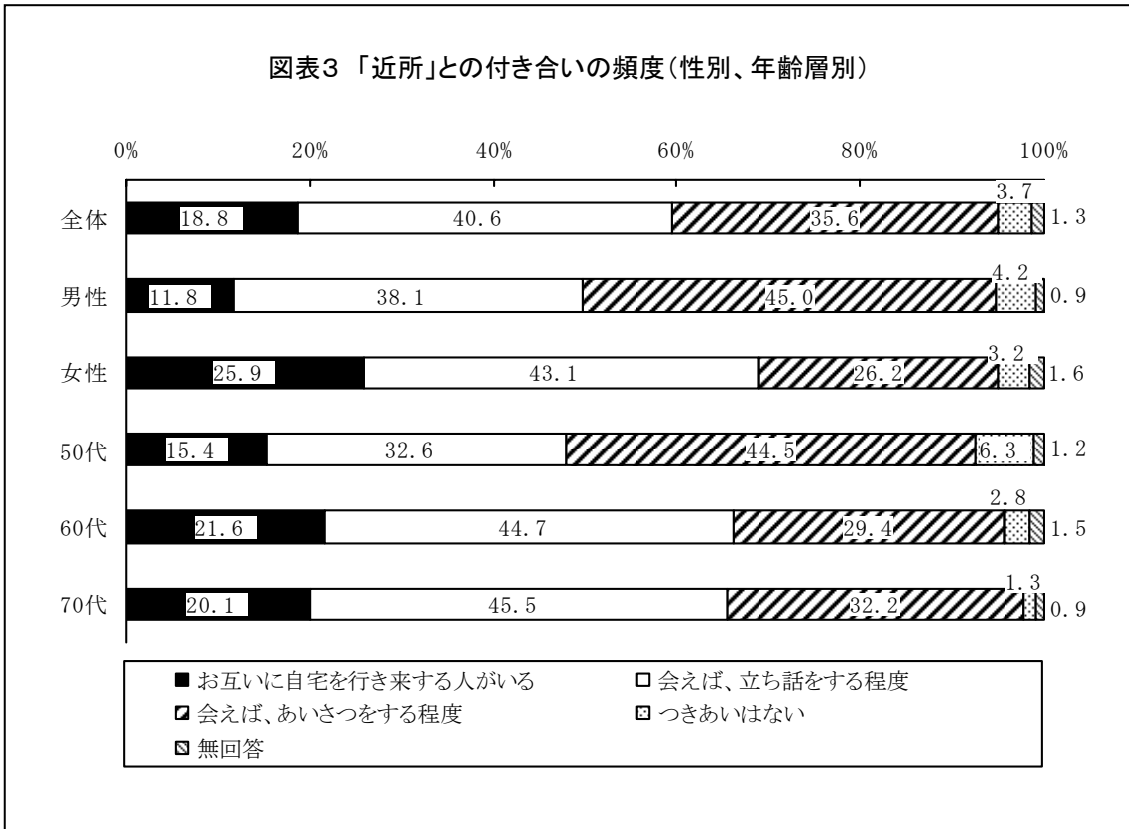


同居形態別でみると、「ほとんど毎日」あるいは「週に1回以上」をあわせた割合は、他の世帯に比べて「1人世帯」(35.0%)や「夫婦のみ世帯」(36.2%)で高く、それぞれ35%を超えました。また、「1人世帯」では、他の世帯よりも「ほとんど毎日」(14.0%)が多い一方で、「ほとんどない」(9.1%)も多いことがみてとれます。一方、「本人(と配偶者)と子」世帯では、「年に数回」(39.8%)が最も多く、「ほとんど毎日」あるいは「週に1回以上」は、「1人世帯」や「夫婦のみ世帯」より少ないことがわかりました。

これらから、別居親族との付き合いの頻度が高い人は、「1人世帯」や「夫婦のみ世帯」では多い一方で、「1人世帯」では「ほとんどない」人も少なくないことから、親族との付き合いの頻度にはばらつきがあるとも言えます。

「近所」との付き合いの頻度①

最も多いのは「会えば、立ち話をする程度」(40%)で、次いで「会えば、あいさつをする程度」(35%)と全般的に付き合いの頻度は低い。「お互いに自宅を行き来する人がいる」人は、男性(11%)よりも女性(25%)に多い。



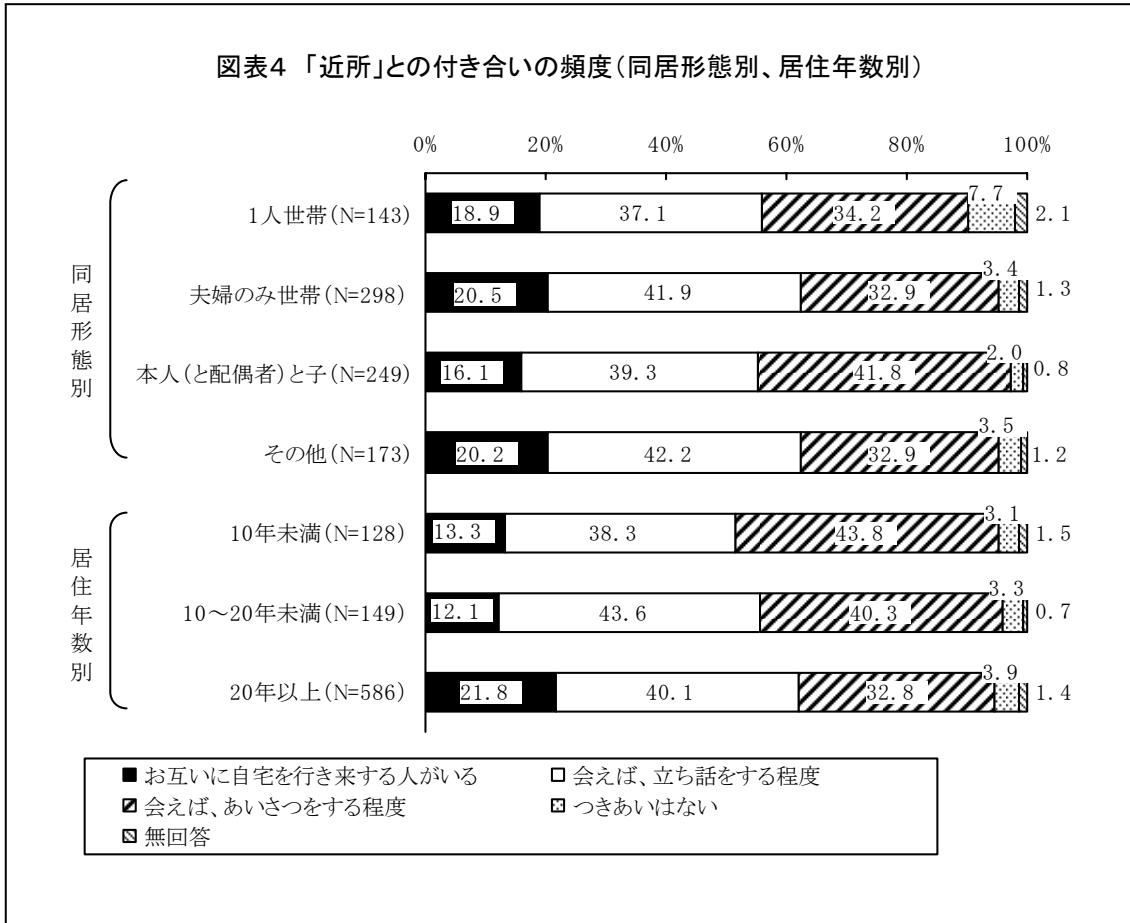
近所の人たちとの付き合い方について尋ねたところ、「会えば、立ち話をする程度」(40.6%)が最も多く、次いで「会えば、あいさつをする程度」(35.6%)の順でした。また、「つきあいはない」は3.7%しかいなかったものの、「お互いに自宅を行き来する人がいる」は18.8%にすぎず、近所との付き合いが密な人は全般的に少ないと言えます。

性別でみると、「お互いに自宅を行き来する人がいる」は、男性では11.8%でしたが、女性では25.9%と4分の1を占めました。また、男性では「会えば、あいさつをする程度」(45.0%)が最も多かったのに対して、女性では「会えば、立ち話をする程度」(43.1%)が最も多いことがわかりました。別居親族との付き合いと同様、近所との付き合いが密な人は、男性よりも女性に多いと言えます。

年齢層別でみると、「お互いに自宅を行き来する人がいる」は60代と70代で2割を超えました。50代で最も多かったのは「会えば、あいさつをする程度」(44.5%)でしたが、60代や70代では「会えば、立ち話をする程度」が最も多く、それぞれ45%程度いました。

「近所」との付き合いの頻度②

「夫婦のみ世帯」では、6割以上が近所と親しく会話する間柄である。
20年以上居住していても、約3分の1は親しく会話する間柄ではない。



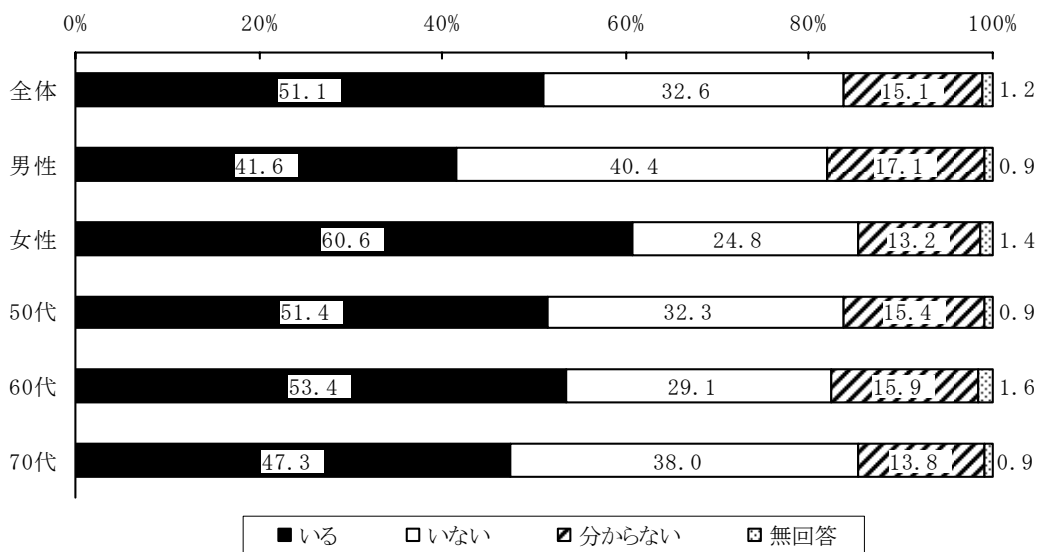
同居形態別でみると、「1人世帯」や「夫婦のみ世帯」では「会えば、立ち話をする程度」が最も多い一方で、「本人(と配偶者)と子」世帯では「会えば、あいさつをする程度」(41.8%)が最も多いことがわかりました。特に、「夫婦のみ世帯」では、「お互いに自宅を
行き来する人がいる」(20.5%)と「会えば、立ち話をする程度」(41.9%)をあわせると、**6割以上(62.4%)が近所の人たちと親しく会話する間柄**でした。

居住年数別でみると、「10年未満」では、「会えば、あいさつをする程度」(43.8%)が最も多い一方で、「10~20年未満」や「20年以上」では、「会えば、立ち話をする程度」が最も多く、ともに4割を超えました。また、居住年数が長くなると、近所と密な付き合いをする人が多くなる傾向がありますが、「20年以上」居住していても、「会えば、あいさつをする程度」が32.8%、「つきあいはない」も3.9%おり、全体の約3分の1(36.7%)は、**近所の人と親しく会話する間柄ではありません**でした。

助け合える友人の有無①

助け合える友人が「いる」人は、全体の51%と過半数を占める。友人が「いる」人は、男性(41%)よりも、女性(60%)の方が多く、50代と60代では過半数を占めるが、70代になると少なくなる。

図表5 助け合える友人の有無(性別、年齢層別)



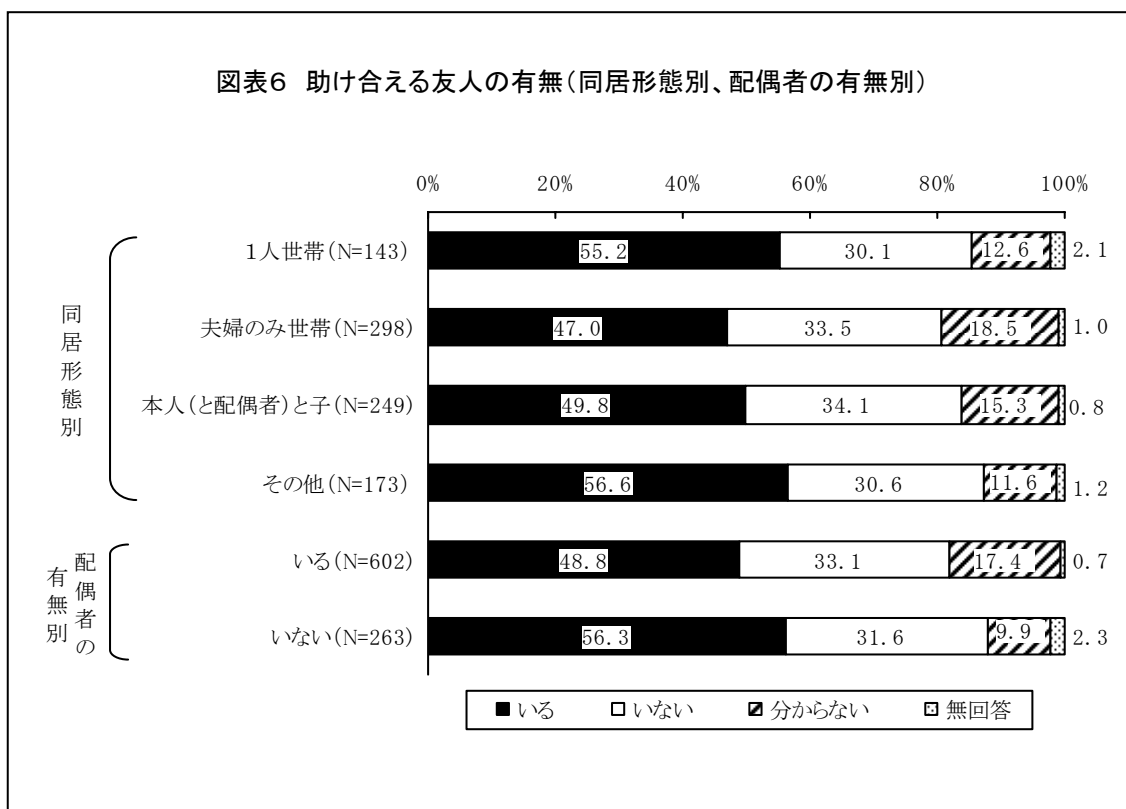
家族や親族以外で、日常生活で困ったときに相談しあったり、いざというときに助け合ったりできる友人がいるかどうかを尋ねたところ、「いる」(51.1%)は半数程度にとどまりました。

性別で見ると、友人が「いる」人は、男性では41.6%しかいないのに対して、女性では60.6%と、男女間で20ポイント近い開きがありました。

年齢層別で見ると、友人が「いる」人は、50代(51.4%)や60代(53.4%)では過半数を占めましたが、70代では47.3%にとどまり、「いない」が38.0%もいました。これらから、全体的に、家族や親族以外で、困ったときに相談しあったり、助け合ったりできる友人のいない人が少なくないことがわかりました。

助け合える友人の有無②

友人が「いる」人は、「1人世帯」(55%)では過半数を占めるが、「夫婦のみ世帯」(47%)や「本人(と配偶者)と子」世帯(49%)では少ない。友人が「いる」人は、配偶者がいる人よりも、いない人の方が多い。



同居形態別でみると、「1人世帯」の過半数(55.2%)が、困ったときに相談しあったり、助け合ったりできる友人が「いる」としましたが、「夫婦のみ世帯」(47.0%)や「本人(と配偶者)と子」世帯(49.8%)では半数に満たず、「いない」が3分の1を超えていました。

配偶者の有無別でみると、配偶者が「いない」人では、友人が「いる」が56.3%もいたのに対し、配偶者が「いる」人では48.8%と半数にも満たないことがわかりました。

配偶者がいない人や1人世帯の人では、配偶者のいる人に比べれば、相談しあったり、助け合ったりできる友人を持っている人が多いものの、そうした友人のいない人も3割いるという事実は注目に値します。

緊急時の連絡先

全体では「子ども」が最も多く、次いで「配偶者」「きょうだい」の順。
 男性では「配偶者」(77%)、女性では「子ども」(77%)が最も多い。
 未婚者や子どもがいない人では、「きょうだい」が最も多い。

図表7 緊急時の連絡先(性別、年齢層別、配偶者の有無別、子の有無別、同居形態別)
 <複数回答>

(単位:%)

	N	配偶者	子ども	きょうだい	消防署	友人や知人	子どもの配偶者	かかりつけの医師	親族	となり近所の人
【全体】	865	67.3	74.6	34.3	24.9	13.8	12.2	11.9	8.8	5.9
【性別】										
男性	433	77.2	71.6	32.9	26.1	7.7	12.8	11.7	9.3	3.7
女性	432	57.4	77.6	35.8	23.8	20.0	11.5	12.2	8.2	8.0
【年齢層別】										
50代	319	63.5	60.6	40.0	28.9	21.3	4.1	7.3	13.3	4.4
60代	320	65.7	82.2	37.8	25.1	11.4	15.2	10.8	6.3	8.9
70代	224	75.2	83.3	21.6	18.5	6.8	19.4	20.3	5.9	3.6
【配偶者の有無別】										
未婚	77	0.0	1.3	65.8	35.5	40.8	0.0	7.9	22.4	15.8
既婚	602	95.5	81.2	28.1	22.4	7.7	12.1	11.1	7.5	3.2
離婚	81	2.6	74.4	42.3	37.2	20.5	9.0	17.9	7.7	9.0
死別	105	0.0	90.3	40.8	22.3	24.3	24.3	15.5	6.8	11.7
【子の有無別】										
いない	140	36.0	0.0	57.6	37.4	29.5	0.0	12.9	18.7	12.2
いる	723	73.5	88.9	29.9	22.3	10.8	14.6	11.8	6.9	4.6
【同居形態別】										
1人世帯	143	2.1	55.7	45.7	33.6	30.0	13.6	14.3	7.9	13.6
夫婦のみ	298	95.9	75.5	31.0	22.4	7.5	16.0	10.9	5.8	3.4
本人(と配偶者)と子	249	82.6	89.1	28.7	21.9	10.9	7.3	9.7	9.3	4.0
その他	173	49.7	67.3	39.2	25.7	15.8	11.7	15.2	14.0	6.4

注:網掛けは1位、下線は2位の項目

ケガや病気などで緊急に手助けが必要になった場合、誰に連絡するかを尋ねたところ、「子ども」(74.6%)が最も多く、次いで「配偶者」(67.3%)、「きょうだい」(34.3%)、「消防署」(119番)(24.9%)となり、上位には、地縁者や親族ではなく家族があがりました。

性別でみると、男性では「配偶者」(77.2%)が最も多く、女性では「子ども」(77.6%)が「配偶者」(57.4%)を上回りました。

年齢層別でみると、50代では「配偶者」、60代や70代では「子ども」が最も多いことがわかりました。また、50代では「友人や知人」(21.3%)は少なくありませんが、60代や70代では少なく、「子どもの配偶者」の方が多いことがみてとれます。

配偶者の有無別でみると、既婚者では「配偶者」(95.5%)と「子ども」(81.2%)が圧倒的に多い一方で、未婚者では「きょうだい」(65.8%)や「友人や知人」(40.8%)、離婚者や死別者では「子ども」「きょうだい」の順になりました。

子どもの有無別でみると、子どもがいない人では「きょうだい」(57.6%)、「消防署」(37.4%)の順になりましたが、子どもがいる人では「子ども」(88.9%)、「配偶者」(73.5%)が圧倒的に多いことがわかりました。

同居形態別でみると、1人世帯では「子ども」(55.7%)、「きょうだい」(45.7%)の順になりましたが、その他の世帯では「配偶者」や「子ども」をあげる人が多いことがみてとれます。また、「友人や知人」をあげた人は、1人世帯では30.0%もいました。

《研究員のコメント》

わが国はすでに超高齢社会に突入しており、昨年には、死亡数が出生数を上回る人口減少社会も到来しました。いまだかつて経験したことのない社会を迎えるにあたって、生活者には、生活意識や価値観の再考、さらにはライフデザインの再構築が迫られることになります。

なかでも、家族のありようや意識が多様化している昨今、介護や死の看取りは家族が担う役割であるという前提や枠組みは崩れつつあります。老いや死を安心して迎えるには、自分はどうしたいのかという意思を持ち、老い支度をしておくことが大切ですが、同時に、血縁だけにこだわらない人間関係を構築する必要性もあるでしょう。とはいえ、例えば昨今の葬送のあり方をみても、地域共同体のつながりが薄れ、親族間のつきあいが減っていることは確かです。

国立社会保障・人口問題研究所の推計によれば、2020年には、世帯主が65歳以上の一般世帯の68.6%が「単独世帯」か「夫婦のみ世帯」になると言われています。また、種々の世論調査でも、「子どもがいても、老後は子どもと関係なく生活したい」と考える人が増加しており、子どもに頼らない生き方を志向する高齢者は多いことが示唆されています。子どもの数が少なくなり、子どもの負荷が大きくなっていることから、子どもに頼れないという状況もあります。

一方で、特に高度成長期以降、都市化や人口の流動化が進むにつれ、地域コミュニティのつながりや親族との付き合いは薄れてきています。このことは、今回の調査結果からも明らかになっており、例えば、現在の地域に20年以上居住している人の3分の1は近所の人と親しく会話する間柄ではなく、また、別居親族と「ほとんど毎日」あるいは「週に1回以上」付き合いのある男性は2割にとどまっていました。つまり、地縁や血縁の枠組みが、老いを支える役割を必ずしも担っているわけではないことがうかがえます。

そうすると、少子高齢時代の社会にあって、私たちが安心して老いや死を迎えるには、地縁や血縁にこだわらない新たな関係を構築していくことも必要となるでしょう。しかし、今回の調査では、日常生活で困ったときに相談しあったり、いざというときに助け合ったりできる友人を持つ人は決して多くはなく、友人のいない人は70代では38.0%、配偶者がいない人や1人世帯でも3割を占めました。

老いを迎えると、生活するうえで様々な心配ごとやリスクが生じることになりますが、いざというときに人的ネットワークがあるということは大きな安心感につながります。もちろん、多様な人たちと交流すること自体が、退職後の生活を豊かにするという側面もあります。近年、様々な場面で人間関係の希薄化が指摘されていますが、幅広い人的ネットワークを構築することの意義を今一度、再認識したいものです。

(研究開発室 主任研究員 小谷 みどり)